私の本音

熊本県立南稜高等学校 生産科学科 畜産専攻　3年　川口 春香

「製造業は給料が高いですよね。」「私は人と関わる仕事に向いていると母が言うので、接客業に就こうと思います。」「進学は無理です。私には弟がいるので。」高校３年生になり、担任の先生と二者面談で将来の話をしました。私は聞かれたくない質問を避けるために明るい自分を前面に出しながら、時には笑いを交え、先生が話を切り出す暇がないくらい間髪いれずに話を続けました。クラスメイトは進路希望を決め、履歴書や面接試験の準備を進めています。進路決定まで時間がないのは分かっているのですが、とうとう、先生から聞かれたくない質問をされました。「ところであなたは、あなた自身は何をしたいのですか?」

非農家の私が初めて農業に触れたのは、小学校低学年の頃、親戚の家の小さな畑にジャガイモを植えた時です。まだ小さかった私は両手で一生懸命穴を掘り、無我夢中で植え続けました。植え終わる頃には、汗だくで顔や両手、服まで真っ黒になっていました。その後も除草や灌水などの管理を行い、収穫したときは家族でお腹いっぱい食べました。それから農業への興味が高まり、「将来は農業をしながら自給自足に似た生活がしてみたい。」と考えるようになりました。

高校は地域の農業高校である熊本県立南稜高等学校に進学し、入学して大きな分岐点がありました。それは、牛との出会いです。初めて農場に行き牛を見たとき、言葉を失いました。初めて目にする牛は想像以上に大きくて、怖くて、全く近づけません。先生に「触ってみろ」と言われ、恐る恐る触ってみると、牛の温もりが伝わってきました。それから学習を深め、牛が優しい動物なのだと感じるようになり、「牛のことを知りたい」という気持ちは大きくなりました。家畜審査競技会や農業鑑定競技会、共進会や放牧を用いたプロジェクト活動など、牛に関わる様々な学習に積極的に取り組みました。その中でも一番印象に残っているのは農家宿泊研修です。

私は酪農を営まれている中村さんのお宅でお世話になりました。学校とは規模も施設も異なり、勉強になることばかりでした。基本的な内容は搾乳、給餌、除糞ですが、その合間に様々な実習を行います。暑熱対策としてホースを引き簡易的な細霧装置を作ったり、風通しが良いように換気扇の掃除を行いました。中村さんの御両親と協力して牧草の刈り取りや運搬のお手伝いをさせてもらいました。中村さんはおっしゃいました。「牛はしてあげただけ返してくれる。牛を育てている俺たちが牛のことを考えて、より快適に過ごせるようにする責任がある。まあ、好きで始めた酪農だけんね。」自分の意志に正直に生きている中村さんの言葉は、格好いいと思いました。

実習で酪農という仕事の大変さも経験しました。日を重ねるごとに眠さは体力を削ります。

加えて８月の気温の下での実習。バケツで水をかぶったような汗で実習服が体にくっつき、体の自由を奪います。二次発酵したサイレージや糞、牛乳の臭いは私の思考を停止させました。必死に農家さんについていき、気が付いたら１日が終わる。そんな毎日でした。酪農はイメージしていたとおり、とてもハードな仕事でした。でも、それだけではありません。重労働ではありますが、毎日、達成感を感じることができます。何より、中村さんの家族の姿が輝いて見えました。奥さんは「高校生の頃、まさか私が牛を育てることになるとは思ってもみなかったよ。」と笑っておっしゃいました。奥さんは３人のお子さんを育てながら哺乳や搾乳の仕事を中村さんと一緒に行います。ご両親も一緒になって働かれ、お子さんまでもが中村さんの真似をして牛舎をうろうろしていました。同じ目標に向かって共に働く家族の姿に仕事としてだけでなく、生き方としてあこがれを抱きました。

宿泊研修最終日の夕食の時のことです。いつもどおり、家族全員の食卓で楽しく食事の時間が進む中、自分の話をしました。私の家庭環境は複雑なので和やかな雰囲気が壊れないか不安でしたが、温かく聞き入れてくださいました。その後、中村さん御夫婦とは進路や仕事の相談をさせていただきました。幼少の頃から家族など周りの人の気持ちを優先して生活してきたため、自分の気持ちを隠してしまい、今では自分の本音が何なのか分からなくなってしまっており、そんな自分に自信が持てないこと。自分の進路希望すらも周囲に流されてしまうと話すと、中村さんは前向きな雰囲気に変えながら、じっくりと聞いてくださいました。

二者面談の中でいくつもの求人票に目を通しました。しかし、私が魅力を感じることは求人票には載っていません。人間も自然の一部として気候や天候と相談しながら、牛のことを考えて一生懸命仕事する。牛はそれに答えてくれる。そして、命の重さ、生き物に触れる楽しさを感じながら、自分たち人間の命をつなぐ食べものがどうやってできているのかを身近に感じることができる。驚きや悲しみ、楽しみを感じながら出来る仕事であり、自分に正直に生きることができる仕事が酪農だと思います。私は先生の質問に答えました。「酪農をしたいです。」

しかし、18歳の女子高生である私が卒業後すぐに酪農を始めるのは大変難しいことです。現在、先生や酪農家の方々に相談しながら、進学、就職、研修と様々な方向から自分が進むべき道を模索しています。それと同時に「こんなことをしてみたい」と描く夢が二つあります。

一つ目が、酪農という職業を親近感の強いものにすることです。魅力あるものには人が集まり、活性化する。まずは酪農の魅力を若い世代に伝えることが大きな一歩だと思います。そのために「酪農フェス」を企画し、私のような非農家の学生やその保護者など、幅広く参加を呼びかけます。各農家のこだわりを伝えるブースをつくり、それぞれ商品を出してもらいます。また、農業高校の取り組みを動画で流すことで充実した毎日や楽しさを伝えます。搾乳やブラッシング、バターやヨーグルト製造などの体験教室を開くとより盛り上がると

思います。大切なのは特別感やオリジナル感。フェス限定の商品、女子中高生向けに最近はやりのミルクを使った保湿クリームやオリジナルドリンクも面白いと思います。話題性があれば若者世代からＳＮＳなどで拡散してもらえる機会も増えると考えます。

二つ目が、女子会の企画です。現場実習に参加させていただいて、農業は家族で取り組むものだと学びました。現在、プロとして働かれている女性の農家の方には自分で酪農の仕事を選んだ方もいれば、嫁いで初めて酪農を知った方も多いようです。ベテランの方からまだ始めて日の浅い方、そんな奥さん方の交流があればもっと気持ちが楽になったり、新しい情報を共有できたり、共感できる仲間が出来ると考えます。また、最近では酪農に興味がある女子高生が少なくありません。そんな人たちにも参加してもらって、女性の先輩酪農家が経験したことを交流しながら話せる。そんな場ができれば今の私のような悩みを抱えている高校生の進路が開けると思います。

私は自分らしさを発揮できる酪農家を目指し、本音と向き合いながら、正直な人生を送っていこうと思います。